

遠

洋

水産研究所ニュース
昭和 59 年 7 月

No. 53

◇ 目 次 ◇

開洋丸 SIBEX 調査航海に寄せて.....	1
第36回 IWC 科学小委員会での「戦い」を終えて.....	5
深海調査随行の記.....	6
スポーツ：養殖研との交歓ソフトボール.....	6
組織の一部改正について.....	7
ク ロ ニ カ.....	7
刊行物ニュース.....	11
人事のうごき.....	14
それでも地球は動いている.....	16

開洋丸 SIBEX 調査航海に寄せて

経 緯

3月14日に南大洋調査(SIBEX)から帰国したものの、10月9日には再び開洋丸としては4度目の南大洋調査航海を控えている現在、58年度調査の紹介に止めず、59年度のそれにも触れておくべきであろう。この2ヶ年にわたる国際調査はSIBEX Phase I(1983/84)、同Phase II(1984/85)と名付けられて、BIOMASS(Biological Investigations of Marine Antarctic Systems and Stocks)に参加している10数ヶ国のほとんどが、両年度にまたがる調査の実施を2年前から公表して来たからである。

南大洋生物資源の調査研究については、本誌に大山龍藏元総務部長(No.25, 51年10月)が紹介記事を載せられたのに続き、故福田嘉男所長(No.28, 52年8月)、奈須敬二前室長(No.33, 54年5月)、高橋利治前開洋丸船長(No.38, 55年10月)がそれぞれ記事を掲載され、また私自身もNo.41(56年8月)に「開洋丸第2次南極海航海記」を寄せているから重ねての説明は省かせて頂く。BIOMASSの国際的年度計画の当初スケジュールでは、第1回国際調査 First International BIOMASS Experiment=FIBEX)を55年度に実施し(開洋丸の55年度調査はこれを実行したもの)、その成果を受けて第2回調査(SIBEX)は58年度(1983/84)に策定されていた。しかし、FIBEXの成果をより拡大する努力を払いたくな

るし、方法論的な反省も働くであろうし、参加各国の諸条件も作用してきたのであろう。FIBEX後BIOMASS参加国間でSIBEX実施時期の1年繰り延べ、2年連続実施の声が高まって、BIOMASS国際委員会は2年連続で実施するという結論に達した。このことは、南大洋の科学的知見を拡大集積するためには歓迎すべきことに違いない。

日本は当初計画に従って、SIBEXの58年度実施を立前として関係諸機関が準備努力を集中、開洋丸以外に白鳳丸(東大・海洋研)、海鷹丸(東水大)、しらせ(極地研)、第2瑞洋丸(開発センター)が、互に連携しつつ独自の計画に基づいて南大洋の調査研究に向かったのである。しかしながら、58年度の開洋丸調査計画を具体化してゆく過程で、関係者は、59年度も南大洋調査がひき続き実施可能か否かを並行して考えねばならなかった。開洋丸は独り南大洋調査だけでなく、当水研が担当している他の資源、特に底魚類の調査にも従事しなくてはならないし、仮に2年続けて開洋丸を南大洋に派遣できるとしても、BIOMASSが求めている広範多岐にわたる調査内容に対応し得るだけの調査員を再び結集できるかどうかという大きな問題があったからである。

58年度当初の「開洋丸運航委員会(旧三人委員会)」が開かれた頃、第2点につき暗中模索状態であったが、長期、中期の開洋丸運用計画の展望が具体化されてゆくとつれ、「調査員を確保せねばならぬ」という意識は、「確保できる」に変わっていった。それは58年10月、海洋部に嶋津靖彦室長を迎えて、南大洋生物資源研究室が名実

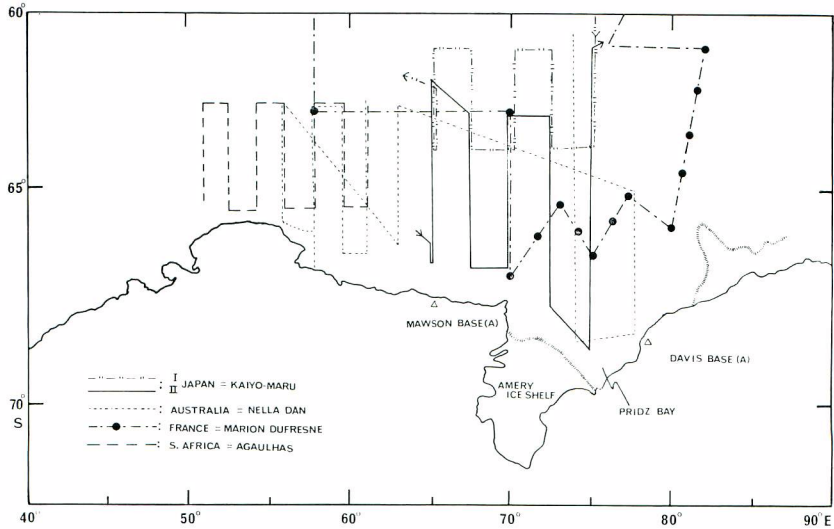


図 1. SIBEX Phase I (1983/84) におけるインド洋区 4 か国の調査計画定線。
但し開洋丸は実施定線。

ともに発足したこと、所内、本庁、開洋丸各位の激励と支持によるところ大である。

59年度計画は後に触れることとし、58年度の調査につき述べよう。正式の調査報告書は、10月出港までに形をなしそうであるから、ここでは「外伝」的な記述に止める。

昭和58年度調査航海

58年度の調査域設定には、多少の経緯があった。FIBEX では、参加13か国はインド洋区、大西洋区の 2 群に分かれた。インド洋区を選んだ日、豪、仏、南アの 4 か国は、0°~90°E の範囲を広域カバーの態勢で各調査域を分担し合った。

さて、SIBEXではどうするか？ 57年5月末極地研で開催されたBIOMASS Colloquium, それにひき続いての専門家委員会で、インド洋区 4 か国が集まることができ、SIBEXでは、1) 調査域、調査パターンをメソスケールとすること、2) Prydz Bay沖合の60°~80°Eの範囲内に各国調査域を設けること、3) 海水流動調査、4) オキアミ (*Euphausia superba*) の遺伝的形質を用いての系群調査を共通項目とすること等が合意された。開洋丸としては、これに BIOMASS 作業部会の 1 つである Working Party on Fish Ecology (日本メンバー：内藤靖彦極地研助教授) の勧告を考慮し、オキアミ採集に当たって混獲される稚仔魚といか類稚仔に従来以上に意を用いることとした。

調査域は65°~75°E の範囲に納め、海洋構造を子午線

沿いに把握する目的で75°E線を南極収束線の北方46°Sから観測することにした。75°E線は 豪州領 Heard Island (53°05'S, 73°30'E) の側を走っているから、豪州政府の諒解を得て同島周辺領海(3マイル)外で、たて縄試験を行うことにした。同じ調査域を2度訪れることにしたから、季節変化を追うことが期待された。表 1、図 1 に開洋丸の航海日程と主調査域を示した。但し、

表 1. 昭和58年度開洋丸南極海調査航海日程

港名	入港日	出港日	備考
東京	—	58.11.4	第1次航調査期間： 昭58.12.4~25 第2次航調査期間： 昭59.1.19~2.3
Fremantle	58.11.21	58.11.26	
Port Elizabeth	59.1.3	59.1.9	
Fremantle	59.2.12	59.2.18	
Singapore	59.2.26	59.3.2	
東京	59.3.14	—	

表 2. 昭和58年度開洋丸南極海調査航海乗船調査員

担当	氏名	所属
総括	小牧 勇 蔵	遠洋水産研究所海洋部
魚類	多部田 修	水産大学校増殖学科
海洋物理	永延 幹 男	東京大学海洋研究所
海洋化学	福井 深	清水市生活環境部
計量魚探	白木原 国 雄	水産大学校漁業学科
鯨類目視	磯部 貞 夫	日本捕鯨協会

第1図で開洋丸の場合は実施した調査線であるが、他の3か国のそれは、Port Elizabeth 入港時に南ア研究者から入手した各国の予定調査線である。表2に今回調査に参加した調査員を示す。これらの方々の御尽力と、各所属機関の御理解並びに御支援に、厚く御礼申し上げる。

第1次航：Fremantle では、なか2日程であるが、先着の照洋丸とバースを隣り合わせ、行縄、宮部両技官と歓を共にできたことは、今次航海の楽しい思い出の一つである。豪州 Antarctic Division, Hobart の Kuowles Kerry に電話し、彼等の調査補給船 Nella Dan の航海スケジュールを聞き、相互に洋上交信をする段取りを決めた。

35°00'S, 107°11'E の点から XBT 観測、表面採水を開始、目視観測もほぼ同時に開始。本観測は12月4日早晩46°S, 75°E から実施。観測の予行演習は重ねてきたものの、新しい補助調査員や、漁撈作業員は本番になると要領が板についていなかったが、回を重ねるごとに作業はスムーズに消化されてゆく。豪州方面から中緯度高圧帯が長く調査域まで延びていて、50°S 附近まで風に恵まれたことが、作業効率を一層高めたともいえる。

しかし、暴風圏はチャンと待ち構えていて、52°S あたりから揺れ始め、ひどい時には私室で書きものをしてる最中に椅子ごと左舷側に放り出され、肩で書棚のガラスを突き破ってしまったりした。Heard Island 水域では西寄りの風が続き、観測作業は大変難渋した。同島は周囲50マイルほどの岩島で、亀が首と尾を残し4肢をひっこめれような形をしている。中央には標高3000メートルの Mawson Peak が屹立しているのだが、3合目あたりから上は密雲に閉ざされ、同水域にとどまっていた24時間程の間に、ついにその頂を見せることはなかった。島の東側では多少風の影響を避けられるものと予測したが、風が島を回りこんで来るのか、どう船を回してもらっても一向に効果が上がらず仕舞いであった。クジラドリが乱舞し、クロロフィルも 2.73 $\mu\text{g}/\ell$ に達する程多かったから、たて縄試験の釣果を期待したのだが、魚探反応皆無、釣果もゼロで大いに落胆した。

島はほとんど氷河に覆われ、その一部は直接海になだれ落ち、南西面には200メートルもあろうかと思われる鉛直の断崖が切り立っており、その景観はまさに北極神話の舞台装置を彷彿とさせるものであった。

Stn. 21 (51°S, 75°E) で径約4ミリの魚卵1個が中層網 (KYMT) に入り、船内で飼育したところ、孵化から約10日で卵黄をほぼ吸収し尽くし、体長約17ミリに達した。卵と仔魚の写真を第2、3図に示す。Muraenolepis 属の魚と考えられる。因みに、1次、2次両航海で船内選別して得られた稚仔魚の数は157個体に止まった。



図2. St. 21 (52°S, 75°E) で得た魚卵。卵径約4ミリ。

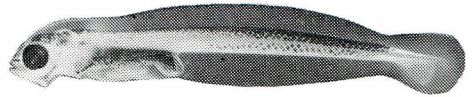


図3. 図2の卵を孵化させて得た仔魚(10日目)。体長約17ミリ。Muraenolepis 属と思われる。

12月11日, 01:00, 62°52.1'S, 75°00.4'E で冰山初認、長径1キロを越す大きさと推定された。55°S を過ぎる頃から暴風圏を脱したのか、静かになっていったが、いよいよ極海の門口に立ったことが自覚されたし、氷との戦いの始まりであることがひしひしと身に迫って来た。

58°S, 75°E でオキアミ初採集。魚探にはそれまで反応が認められてはきていたものの、実物を手にすることは矢張り喜びである。75°E 線上63°30'S 附近でバックアイスに行く手を阻まれ、以後64°S 以南へ南下できず仕舞いであった。しかし、航跡を電光形に変えたり、バックアイス沿いに船を走らせたりして、オキアミ群探査を面的に拡げる努力に時間を活用した。

FIBEX は古野電気製 FQ-30 型魚探機を装備しての調査であった。これは計量式魚探機の我が国における処女機であった。今回は改良された FQ-50 を搭載しての調査となったが、どうも記録自体も淡く、従って SV 値も低い。私は機構的なことに不案内であるから、ただ小首をかしげるだけであったが、果たして、トランスデューサーに微妙な温度特性があって、殊に0°C前後で著しいことが後刻メーカーから伝えられた。魚探機を担当した白木原氏は、航海から帰って早速 IWC 会議をはさむ多忙な中で、この問題にとり組んでいる。計量式魚探機が開発途上にあることは理解しているつもりではいたが、こうした問題に遭遇すると、器機メーカー自身が指摘しているように、生物の採集努力と隔離して魚探機の的確な運用はあり得ないこと、また「採集手法」という古くて新しい問題に立ち返らざるを得ないことを思い知らされた。

海上で正月を迎えるのは、私にとっては FIBEX に次いで2回目である。船内時で年の瀬を越したのが43°12.8'S, 29°27.5'E。暗夜の海上に響いた長一声の吹鳴は、未だに耳の奥から消えない。

大晦日に向井漁撈士が腎臓結石の発作を起こし、船足

をギリギリに上げ、予定より1日早い1月3日 Port Elizabeth 入港。高見ドクターの処置よろしきを得て、発作は治まったものの、現地専門医の忠告に従い、帰国して貰った。本人の無念や想像に余りある。

Pott Elizabeth では、レセプションのホスト側の1人として振舞ったり、訪問客が多かったり、魚探機の故障の件があったり、結構多忙なこととなった。

BIOMASS関係の南アの研究者 Hampton, Miller, Allanson らの訪問を受け、情報の交換や、オキアミの遺伝学的研究材料を手交したりした。図1のインド洋区3か国の調査船配置は、その際、初めて入手したものであった。また大滝部長はじめ海洋部諸兄姉からの手紙やテープが届き、日本オキアミ漁船の58年度漁期中の操業状況が判ったり、59年度の南大洋調査が実現するものとして、船医希望者が2名も出て来たことを知ったり、機器故障などでいささか湿り勝ちだった私の心も晴れやかになっていった。なお、遺伝学的研究用に南アに提供したオキアミ凍結標本は、国際共同サンプルであり、日本独自のサンプルを確保しておいたことは勿論である。

多数の訪問科学者が去って行った後に、私などそれでオキアミを勉強したと云ってよい業績を残している、B. P. Boden教授の名を訪問者名簿の中に見付け出し、地団太を踏んだがもう後の祭りであった。オキアミ標本を受け取って行ったMillerの笑顔は忘れ難いが、彼が後刻託送してきた Virgin Island Rum の1瓶に "From one of the Southern Indian Pirates" というカードを付けて来たせいであろうか。

彼が伝えてくれたニュースによれば、豪州のMawson, Davis 両基地周辺の氷状はこのほか酷しく、彼等の調査補給船 Nella Dan は Hobart 出港を延期しており、従って SIBEX Phase I の調査活動は、時間的に極端に追いつめられているとのことであった。これは他人事ではなく、再度 Prydz Bay 水域に向かおうとする開洋丸にとっては、不気味な情報であった。

停泊中、私の周辺で寸劇があったが、体験者自身が語るよりも周囲の人達から紹介して貰った方が興味深いであろうから、強いて思わせ振りの表現のみに止めて置く。

第2次航：長くて短い停泊期間が過ぎ、1月9日開洋丸は再び船首を南大洋に向けた。1次航に比べ東寄りの風が強く、結構揺られた。しかし調査活動を阻まれることはなかった。

Fremantle で打合わせてあった通り、彼等の Hobart 出港遅延を計算に入れて、Nella Dan との交信を1月17日頃から試みた。19日電話連絡がとれ、当方としては彼等が通過して来た航路上の氷状が具体的につかめ、大変参考になった。先方は何と Mawson 基地地先で氷に閉じこめられて身動きができないという。何やら "遣ら

ずぶつたり" といった一方的な情報の入手となつてしまい、尻こそばゆい 思いであった。Nella Dan には北大出身の池田勉氏が乗っており、彼と日本語で交信できたことは楽しかった。また先方の通信士は何と女性で、それもなかなか耳に快い音声の持主だったものだから、局長との間で相当長い間話題となったものである。

約1ヶ月の時間を置いて、一次航と同じ水域に戻つてみると、あの一望累々たる氷は一体どこに消えてしまったのかと疑いたくなる程、水路が開けており、Nella Dan の Kerry から得た氷状情報が実際とは違っていたことに、胸を撫でおろしたものであった。

予定通り 68° S 線まで、各南北観測線を南下することができ、特に Prydz Bay 内では 69° S を越すまで奥深く航進でき、期待すらしていなかった南極大陸視認ができたことはやはり印象深いものであった。また、陸棚斜面上に観測点を設けることができたことも、二次航における収穫の1つであろう。Prydz Bay 内は折から珪藻の bloom 中で、海水は粘度を増す程に感じられ、オキアミ相は大陸に近い E. superba から E. crystallorophias に変わっていた。

2月3日、調査を打上げ、Fremantle にコースをとる。南大洋は不思議な海で、「近い中にまた来るぜ」と海に語り掛けている自分の独白に気付いて、びっくりしたものである。

昭和59年度調査航海

58年度の調査作業が進む過程で、一方では59年度の調査計画が四六時中私の頭の片隅から離れることがなかった。調査域をどこにするか？ インド洋区、太平洋区にすることは容易であるが、既成概念に過ぎるように思っていたところ、Port Elizabeth で58年度漁期、日本船が10隻中7隻まで大西洋、Scotia Sea に出漁するということを知り、私の考えは大いに揺らいだ。帰国早々、船内で立ててみた計画について各方面に相談してみたところ、賛否交々であった。4月27日、開洋丸で本庁関係部課担当者も交えた協議の結果、南東太平洋、Drake Passage、及び Scotia Sea 方面の調査を実施することで水産庁としての意見の一致がみられ、国内外関係機関、関係者にもその旨連絡をとり意見を求め、6月21日には南極地域観測統合推進本部総会でも原案が承認されるなど、国内的な手続きの大半を終わったところである。一方国外からも反対の声はなく、激励の通信が入って来ている。ただ自重してBIOMASS関係諸国と緊密な連絡は保持せねばならないし、SIBEX Phase II で昭和基地に向かう "しらせ" を除けば、日本からは開洋丸1船であることを十分心得て、調査の内容を密度の高いものにしなければならぬと考えている。ただ、心情的に Southern Indian Pirates から離れることに、一抹の寂しさを禁じ得ない。(小牧勇蔵)

第36回国際捕鯨委員会・科学小委員会 での“戦い”を終えて

国際捕鯨委員会 (IWC) は今年36回目の年次会議を6月18日から1週間、アルゼンチンの首都で開催した。結果については、すでにマスコミの報道で周知の通りであるが、その前哨戦として、科学小委員会 (SC) 会議が5月26日から2週間にわたって、英国のイーストボーンで92名の多数の参加者によって行われた。しかしながら、この会議は科学者による政府間交渉の体をなさず、非論理的で無政府的な討論の場であり、しかもそれは凄惨な戦いの場でもあった。

魔女狩り IWC/SCは1960年代から1970年代前半にかけて鯨類資源の合理的管理へ向けて懸命な努力をした結果、アングロサクソン系捕鯨団が次々に捕鯨から脱落し、反捕鯨運動が高まるにつれて、それらの国からSCに派遣される科学者の陣容が変質してきた。良心的な科学者は自ら引退するか、あるいは“捕鯨の踏み絵”を踏まなかった科学者は“魔女狩り”にあって委員から外されるかした。そして反捕鯨団体の息の掛ったエセ科学者が取って変わるか、あるいはかつては良心的であった科学者も“踏み絵”を踏んで転向して生き残るかせざるを得なくなってきた。今年の会議の直前にも、ある公正な科学者は反捕鯨勢力の圧力によって突然に参加を差し止められたと聞いている。かくて今年にはSCにとって最悪の事態となり、あたかも暴力集団に占領された感があった。彼らは独りよがりの理論を振りかざして会議場を暴れ回り、わずかに残っていた正常で優秀な科学者を激しい精神的暴力でおどし上げて、会議場での口を封じるという卑劣な行為を公然と行った。

かつてはもしも対立する見解があれば、良識のある科学者が中に入って行司役を勤め、公正な判定がSCとしてなされたものであった。しかし今日ではそのような立派な科学者は会議場から去り、捕鯨国からの参加者も含むその他の出席者は、御身大切と貝のように固く口を閉ざしているばかりであった。

かくして今年のSCはジャッジのいないボクシング試合のようなものとなり、爽りのない論議という打ち合いが延々と展開された。双方ともにノックダウンをせず、会期切れのゴングが鳴って、やっと血みどろの戦いを終えた。ジャッジの判定が出されない以上、ダウンさせなければ、実質的に不利となるのはこちらである。なぜならば、相手は少数意見としてでもSCの報告に彼らの主張を記載させられれば、絶対多数の反捕鯨票をたのむI

WC総会でそれを有効に利用して、容易に捕獲割当量を減らすことが出来るからである。

気違い部落 最近のIWC/SCは、国際会議としてあまりにも異常である。会議はこの10年近く、大学寮かあるいはホテルに参加者が缶詰になって開かれ、連日朝から夜半まで続けられる。休憩は短い2度の食事(昼と夕の)と2度のお茶の時間しかない。その上に今年は今期中の土、日曜日は2度とも全く休まずフルに働いた。このように非人道的な会議の運営がここではまかり通っているのである。

これは非英語国からの参加者にとっては極めて大きな負担となるので、不公正である。唯一の公用語であるとして英語だけが会議で許され、大量の英文ドキュメントを短時間に読まされ、しかも会議場では早口で英語をまくしたてられるのである。このように、言葉のハンディキャップで非英語国委員(大部分が捕鯨国)は英語国委員(全部が反捕鯨国)よりももともと不利であるのに、さらに会議期間中に徹夜で計算したり、ワーキングペーパーを作成したりしなければならないのであるから、その精神的苦痛と疲労たるや並大抵のものではない。言葉だけで勝負が決まるわけではないが、苦しまぎれに、有利な条件を少しでも利用しようとする彼らには、人道主義や騎士道の片鱗すらもないのである。

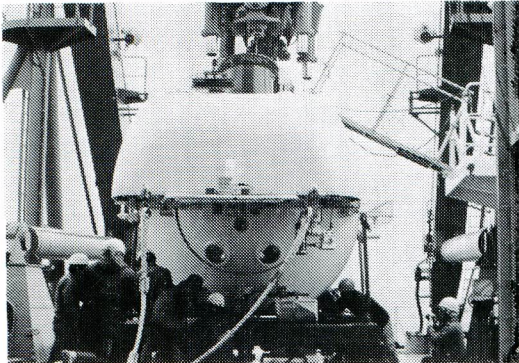
建設なき破壊 合理的資源管理方策を勧告するには、理論を構築し、それと得られた資料とから資源を解析し、管理方策を提案しなければならない。しかし、SCの暴力集団はそのようにして生み出された理論や資料やその結果を批判するだけで、十分に彼らの目的を達することが出来る。批判という破壊は、提案という建設よりもずっと易しいのである。今年ほど彼らのそのような意図があからさまに会議で示され、それに沿って徹底的な破壊が行われた年はなく、彼らは以前に自らが築いた理論までも放てきして自爆しようとさえしたのである。生物資源の管理について、完全な理論と完璧な資料はあるわけがない。要は“trial and error”の前向きの姿勢を持つことであり、ないものねだりだけしては管理が出来るはずはない。彼らの狙いは捕鯨国をいじめ抜くことにあるのであるから、管理方策の勧告が出なかったり、ためにする批判によって故意に安全率を大きくして、出来るだけ低い数字の捕獲限度量を出したりすれば良いのである。

日本からSC会議に参加した田中東京大学海洋研究所教授はこのむなしい戦いを終えた時に、「もはやIWCでは科学は消滅した」と嘆かれた。今やIWCの良心は瀕死の状態にある。(大隅清治)

《深海調査随行の記》

オーギュスト・ピカールと言えば、成層圏1万mを気球で最初に制覇し宇宙線の謎に迫った物理学者であるが、彼はまた深海潜水艇の設計・建造にも精力を傾け、今なお残る潜海深度記録は、息子ジャック・ピカールによって樹立されたものである。筆者が「しんかい2000」の調査にサポートとして応じたのも、幼い頃の憧れであった彼ら親子とバチスカーフの幻影に導かれてのことかも知れない。母船「なつしま」及び潜水調査船「しんかい2000」の構造・性能等については、既に各方面で紹介されており、また筆者はその筋の専門家でもないので割愛するが、実際目の前にした深海調査船のなんと頼りなく見えたことか。それもこれも筆者の20年近い深海への思い入れが、あまりにも強すぎたためかも知れない。

さて今回の駿河湾調査では、ずわいかにか及びいばらがこの摂餌行動を観察し、できれば無傷で生け捕りにしたいという川崎室長の発案で、小型折りたたみ式かにかごを2個用意した。寄せ餌として、ペーリング海産のギ



潜航準備のため艇を海面へ

スポーツ 養殖研との交歓ソフトボール

“淡水、海水両施設を結ぶサニー道路、遂に完成。”
今年の交歓ソフトボールへの招待に当たっての養殖研からのメッセージ第一報がこれであった。それまで、内陸の玉城庁舎と海辺の南勢庁舎との行き来には、車で優に1時間以上を要していたと聞く。何はともあれ、この新生養殖研を一刻も早く訪れんものと期待に胸ふくらませて同行のメンバー共々車で清水を後にした。

時は5月26日土曜の昼下がりに、所は玉城庁舎のグラウンド。心配した雨にも降られず、暑くもなく、絶好の野

ンダラ、メヌケとナミビア沖のマアジを使うことにしたが、果たして日本のかにかの口に合うかどうか気が掛りであった。しかし、かにかごの調整を兼ねて清水港内で試験的に沈下したところ、うつぶ数尾を漁獲(?)できたので、生物捕獲に対する期待がふくらんだ。

潜水調査を翌日に控え、楽しい夕げのひとつとなった。母船全体についても言えることだが、特に食堂とサロンは頻繁に入れ替わる来客や調査研究者を意識してか明るくゆとりのある造りとなっていて、小さな漁船や海洋観測船にしか乗ったことのない筆者には、いくぶん場違いな雰囲気であった。次々と出される料理もまた良く手をかけてあり、かなり上品な部類に属していたが、我々2人は腹が減っては戦ができぬと、周囲の目を気にしつつも胃袋にひたすら詰め込んだ。食後、最後の打合せを終えてから、「しんかい2000」の最高責任者である司令とよもやま話を花を咲かせた。終戦後まぐる船の船長として苦勞されたこと、オメガシステム導入に心血を注いだこと、さらに潜水船「くろしお」以来、深海調査の歴史と共に歩まれたことなど興味が尽きなかった。

翌朝うす曇りの中、川崎室長はにっこり笑って船に乗り込み、いよいよ潜航が開始された。潜水中、母船上で計器類から得られる数少ない情報を頼りに、目に見えぬ世界にいる人を案ずるのは、さながら産室の廊下で待つ男の身という所か。なんとももどかしい気分であった。

浮上後、揚収中まっ先にかにかごに目が行ったが、いくぶん変形した中に寄せ餌が残っているだけであった。しかし、結果については何も言うまい。調査を終えて甲板に降り立った川崎室長ら調査員の顔には、緊張からの解放感と満足感が満ちあふれていた。

現在既に深度6000mを目標としたバチスカーフ型調査船の建造が計画されつつあり、我が国にもようやく深海調査の本格的幕開けが近づいたようである。(勝山潔志)

球日和で、まずはプレーボール/第1試合を6対5(念のため、勝ったのは我が遠水研)の好ゲームで終え、白熱の第2試合に突入。双方あい譲らず2対2の最終回、あわや延長かと思われたその刹那、試合は急転直下終幕を迎えた。2アウトながら走者1、3塁の大ピンチ、ここで養殖研は取って置きピンチヒッターを起用。登場したのは、某係長ののたまう“養殖研のルンルン姐や”その人。それまで好投の我がエース、手元狂ったか外角やや高目の甘い球。敵もさる者、何の気負いもなく軽くバットを合わせれば白球はセカンドの頭上を越えて右中間へ……、劇的なさよならヒットではありました。

戦い済んで日が暮れて、さて待望の夜の交歓会へとサ



ニ道路を南勢町に向けてひた走る。途中の山間は緑繁く谷底深く、道険しくて命がけ。さればハンドルさばきは慎重の上にも慎重に、日もとっぷりと暮れた頃やっとの思いで目的の南勢庁舎にたどり着く。

かくして仕上げは養殖研30数名、遠水研22名の大懇親会。年に一度の会合でもあれば、大いに談論風発、痛飲歓談のうちに時の経つのを忘れる。何はともあれ、同じ東海地区で水産関係の公務に勤しむ仲間同志の楽しくもまた有意義な交歓会ではありました。

(角 昌俊)

組織の一部改正について

当遠洋水研では、4月12日付けで下記のように組織の一部が改正され、それに伴う人事異動がありました。

(新 組 織)	(旧 組 織)
底魚資源部	底魚海獣資源部
北洋底魚資源研究室	北洋底魚資源研究室

遠洋トロール資源研究室	遠洋トロール資源研究室
おっとせい資源研究室	おっとせい資源研究室
	鯨類資源研究室
海洋・南大洋部	海洋部
海洋第1研究室	海洋第1研究室
海洋第2研究室	海洋第2研究室
鯨類資源研究室	南大洋生物資源研究室
南大洋生物資源研究室	

ク ロ ニ カ

3. 27 おっとせい定例会議 モスクワ 吉田技官(～4.15)：おっとせい資源の現状及び管理施策について討議すると共に、商業漁獲数及び調査計画について審議した。
4. 1 昭和59年度日本水産学会春季大会出席 東京 伊藤(準)、加藤両技官。
4. 2 日米漁業協定に基づく研究者定期協議 東京 大滝部長、岡田、山口、佐々木、若林、手島各技官、森調査役(開発センター)及び水産庁石田技官外7名(～6)：米国側、北西・アラスカ漁業センターW.Aron所長、M.Hayes、R.Marasco両部長、L.Low副部長、R.Bakkala、L.Ronholt及びS.Davis(地域漁業管理委員会)出席。北太平洋海域の主な底魚類の資源評価、調査結果、調査計画及び生態系モデル等について検討した。ベーリング・アリューシャン水域の底魚類の資源は、スケトウダラの1977-81年級群の加入状況及びマダラの1977年級群の動向に関して見解の相違がみられたが、それ以外の魚種は、共同調査の結果をふまえて両国の評価は一致した。アラスカ湾の底魚類のうち、ギンダラの生物学的許容漁獲量を日

本側が2.4万トンと主張したのに対して、米国側は1.1-1.2万トンとした。シュリコフ海峡の産卵スケトウダラを漁獲対象とする米国の漁業のあり方について注意を喚起した。また、生態系モデルの資源管理への適用について意見を交換した。

4. 3 水産庁研究所長会議 東京 池田所長(～4)、林企連室長。
昭和59年度上級試験採用者研修 東京 谷田部遠藤、平松、小井土各技官(～19)。
昭和59年度初級試験採用者研修 八王子 国分事務官(～7)。
4. 4 水産庁研究所企画連絡室長懇談会 東京 林企連室長。
ベーリング海底魚標本搬送用務 東京 若林、井上両技官。
4. 5 北海道教育庁実習船管理局三國次長、早坂船長若潮丸によるさけ幼魚調査及びクロマグロ稚魚調査打合せのため来所。
5. 7 ICCAT 資源研究研修コース受講者として韓国研究者梁元錫氏来所(～16)：浮魚資源部でまぐろ類の資源解析に関する研修を行った。
4. 8 昭和59年度かつお研究協議会 東京 鈴木技官(～10)：カツオの生態、資源に関する討論及び漁況、海況の経過報告及び今後の予報の検討を行

った。

4. 9 日本トロール底魚協会吉田氏外2名, ニュージーランド訪問打合せのため来所。
4. 10 東京大学海洋研究所田中教授外3名, ミンククジラ性成熟年齢検討のため来所(～11)。
4. 12 国立科学博物館宮崎氏, イシイルカ調査打合せのため来所。
4. 13 南大太平洋フォーラム漁業機関 Philipp Muller 事務局長夫妻視察のため来所。海外漁業協力財団高瀬専務理事外2名随行。
4. 14 海洋水産資源開発センター 佐藤氏, チリー沖あじ資源の調査に関する打合せのため来所。
4. 16 第6回IWC対策科学小委員会 東京 池田所長大隅部長, 粕谷, 嶋津, 和田, 宮下各技官: マッコウモデル, ミンクモデル, ミンク生物学的パラメータの経年変化などについて討論が行われた。
次期海洋観測衛星検討委員会 東京 松村技官: MOS-1に続く海洋観測衛星の概念設計に関する全体会議。行政・開発・ユーザー等, 各方面にわたる議論が行われた。
4. 17 マリンランディング計画研究協議会 東京 森田部長(～18): 59年度の実施計画, 予算等を協議した。
4. 18 日ソさけ・ます漁業政府間交渉第7回会議 モスクワ 高木技官(～5. 1): 北西太平洋における日本のさけ・ます漁獲の手続き及び条件に関する交渉のため表記会議に出席した。さけ・ます資源状態の評価及び1984年の来遊量子測について, 日本側の見解を述べ, 討議を行った。
昭和59年度さけ・ます調査打合せ会議 釧路 小達部長, 伊藤(準)技官(～21): 北洋さけ・ます調査を実施する調査船の乗組員と関係機関の担当者50名が出席し, 調査の趣旨及び実施要領の説明を行った。20日には参加調査船10隻のうち5隻が釧路港より一斉に出漁した。
4. 19 ICCAT 会議対策及び生態系モデル解析に関する検討会 清水(～20): 水産庁島参事官, 石田班長, 中前班長, 堀尾技官, 遠洋水研池田所長, 林企連室長, 森田浮魚, 大滝底魚両資源部長外関係者が両事項についてそれぞれ協議した。
潜水調査船“しんかい2000”による海底生物調査 駿河湾 川崎, 石田両技官(～20): 駿河湾口34°47'N, 138°38'E付近(最大水深1560m)に潜航し, タラバガニ類の生態を観察しつつ, 写真撮影を実施した。
4. 19 ベーリング海底魚資源調査打合せ 東京 山口技官(～20): 日米共同底魚資源調査の具体的な進め方について, 調査船(第5福進丸)関係者と打合わせた。
4. 23 水産庁田辺研究課長視察のため来所。
人事関係事務打合せ 東京 川越総務部長。
会計事務打合せ 東京 木下会計課長。
4. 24 科学技術庁国立機関原子力試験研究費昭和60年度概算要求ヒアリング 東京 加藤技官: 底魚類に対するアクチバブル・トレーサーの応用技術の開発研究について説明を行った。
米国 NMFS, C.K.Harris氏, ワシントン大学, D.E.Rogers教授, さけ・ます調査研究打合せのため来所。
水産庁市橋事務係長引率の昭和59年度新規採用者20名, 現地研修のため来所。
4. 26 北海道教育庁実習船管理局若竹丸服部船長, 北洋さけ・ます調査打合せのため来所。
日鯉連囀託 S.Campen 氏外1名, まぐろ研究実態視察のため来所。
4. 27 水産庁長田参事官外1名, ミナミマグロ資源問題並びにニュージーランド底魚資源問題打合せのため来所。
昭和59年度開洋丸南極海調査航海計画打合せ 東京 嶋津, 小牧両技官: 本庁資源課, 研究課, 国際課, 船舶管理室, 開洋丸幹部との打合せの結果, 調査水域を東南太平洋区, ドレイク海峡, スコシア海とすること, 本年10月9日東京出港, 明60年3月14日帰港の日程を合意した。
次期海洋観測衛星 OCTS (海面水温計) 分科会幹事会 東京 松村技官: 主査代理として今後の方針を討議した。
5. 3 北洋さけ・ます及び海産哺乳動物調査(第1次航海) 函館～北西太平洋 川崎技官(～6.17): 水産庁用船若竹丸(北海道教育庁実習船管理局)に乗船し, 流し網による漁獲試験と生物測定, はえ縄による標識放流を実施し, 混獲されたイシイルカを収集した。
5. 6 日米共同ギンダラ・マダラ資源調査(第15龍昇丸)アリュージョン水域 佐々木技官(～6.21): 1983年に引き続き, アリュージョン水域においてはえなわ漁具による資源調査とギンダラ系統群解明のための標識放流を実施した。
5. 7 昭和59年度北洋イルカ対策検討会 東京 小達部長(～8): 水産庁研究課担当官, 委託先の日

- 本大学農獣医学部水産学科及び関係機関の担当者が出席し、本年度の調査計画を検討した。さけ・ます調査船若竹丸、いるか調査船53宝洋丸での乗船調査に協力することとした。
5. 8 日米科学技術協力及び水産庁のリモートセンシング研究体制に関する検討会 東京 松村技官。
昭和59年度機械集計予算配分ヒヤリング及び用船事務打合せ 東京、気仙沼 竹内 事務官(～11)。
5. 9 ICCAT 研修生梁元錫氏(韓国)の市場調査研修 焼津 久米技官(～11)。
5. 10 第7回IWC対策科学小委員会 東京 池田所長、大隅部長、粕谷、嶋津、和田、宮下各技官(1～11)：会議提出ドキュメントの概要について各分担者から最終報告がなされ、問題点の討議が行われた。
全国試験船運営協議会通常総会 東京 森田部長、宇都技官：事業報告、運営計画等の問題が協議され、水研からは委託費、運航計画等について要請した。
ICCAT クロマグロ研究打合せのため東海区水研本間技官来所。
ICCAT 派遣韓国研修生の指導 東京 河野技官(～16)。
5. 12 南東大西洋漁業国際委員会(ICSEAF)まあじ類年齢査定作業部会 ハンブルグ 畑中技官(～20)：関係国の専門家8名が出席し、南東大西洋産まあじ類(*Trachurus capensis*)の年齢 査定ガイドライン(第1次ドラフト)を作成した。
リモートセンシング技術開発に関わる海洋光学実験 駿河湾 松村技官。
5. 15 第2回沿岸域漁業管理適正化方式開発調査打合せ会議 東京 小達部長(～16)：水産庁研究部長並びに担当官より、本委託事業に関する概要、留意事項、電算機関連業務に関する実施要領について説明を受け、検討を行った。委託先の日本水産資源保護協会、関係水試及び水研の担当者が出席した。
ICCAT 対策検討会 東京 林企連室長、森田部長、久米、永井両技官(～16)：1984年 ICCAT 対応の研究計画を行政、業界に説明し、問題点を協議した。
航空機OCSを用いた藻場調査 三河湾 松村技官(～19)：OCS(オーシャン カラー スキャナー)を用いて藻場の分布と密度を求める実験的研究を行った。
5. 17 日本・ニュージーランド漁業協議(いか、底魚類関係) ウェリントン 魚住技官(～26)：1983/84年漁期における我が国トロール及びいか釣り漁業の漁獲概況を説明し、資源は安定的に推移しているとの見解を述べた。また、NZ側から出された1984/85年漁期の管理方策に関し、特にいか資源の管理方策についての論議を行った。NZ側の最終案は後日回答されることになった。
清水市青年商工会議所での講演会 清水 山中技官：「世界の異常海況、気象について」。
5. 18 第12回BIOMASS小委員会 東京 大隅部長、嶋津、小牧両技官：BIOMASS国際基金、SIBEX Iの報告、その試・資料取扱い、SIBEX II計画、BIOMASS関連の国内外の集会等につき情報交換と討議を行った。特にBIOMASS(事実上SIBEX)生物サンプルの保存管理につき引き続き討議が行われ、現時点では参加各船の運航責任研究機関がその任に当たることで合意された。
昭和59年度漁業公害対策調査検討会 東京 吉田技官。
日本栽培協会須田理事、元素標識について打合せのため来所。
5. 20 ベーリング海底魚資源調査(第5福進丸) 石巻 山口技官(～6.20)：計測機器による袖網間隔の測定(8回)、かれい類のCPUEの時間的地理的变化に関する調査(20回)及びコガネガレイの標識放流(1,000尾)等を実施した。
5. 21 北洋さけ・ます母船生物調査説明会 函館 伊藤(外)技官(～24)：母船上で行うさけ・ます生物調査、海洋観測及び海産哺乳動物の目視調査に関する実施要領を説明した。さけ・ます乗船監督官、調査員及び関係者が出席した。
昭和59年度おとせい網絡まり調査打合せ 沼津市三津 吉田技官：網絡まり実験内容について打合わせた。
予算関係事務打合せ 東京 木下会計課長。
山梨県魚苗センター大浜氏、サケ科魚類の集団研究会打合せのため来所。(～23)
東北区水産研究所桜井庶務課長補佐外1名、物品検査のため来所(～22)。
5. 23 企画連絡室長会議 東京 林企連室長。
東海大学大学院特別講座にて講演 清水 松村技官：「宇宙基地を用いた漁業情報システム」。
おとせい委託飼育事務打合せ 沼津 角事務官。
5. 24 水産庁研究所企画連絡室長会議及び懇談会 東

京 林企連室長, 佐藤技官 (～25)。

第36回 IWC 年次会議科学小委員会会議 イーストボーン 池田所長, 大隅部長, 粕谷, 嶋津, 宮下各技官 (～6.7) : 他機関よりの参加者を含めて, 各分科会及び本会議の種々の議題の討論に対応した。

ミナミマグロの国際管理に関する日本, 豪州, ニューゼーランド3国協議 キャンベラ 河野技官 (～6.3) : 科学者会議では3国の資源評価はおおむね一致し, 前回会議(1983年4月, 清水)での勧告を再確認した。ひき続いて行われた行政官会議では, 今まで以上の漁業規制が将来必要であること, それらの規制は相補的なものでなくてはならないこと等を確認した。

赤潮対策技術開発試験 (リモートセンシンググループ) 計画会議 東京 松村技官。

5. 28 物品管理定期検査 波崎町 白鳥, 杉野両事務官 (～30)。

5. 29 日仏海洋学会学術研究発表会 東京 山中技官 : 「太平洋におけるクロマグロの分布, 回遊とエル・ニーニョ」について講演した。

5. 31 アラスカ湾底魚資源調査打合せ 東京 岡田, 若林, 手島各技官 (～6.2) : 日米共同底魚資源調査の具体的な進め方について, 水産庁の係官を交えて調査船 (第37大吉丸) 関係者と打合わせた。

日鮭連榎本専務, 成田参事, 母船式さけ・ます漁業に関するイシイルカ調査打合せのため来所。

6. 1 海洋水産資源開発センター谷津氏, ニューゼーランド底魚資源調査打合せのために来所。

6. 4 北西大西洋漁業機関 (NAFO) 科学理事会 ダートマス (カナダ) 畑中技官 (～23) : 8カ国の科学者62名が出席し, マツイカ及び主要底魚類の各ストックの資源評価と1985年漁期の許容漁獲量を推定, 勧告した。日本が漁獲対象としている3+4区のマツイカ及び3M区のアカウオの許容漁獲量は, 前年と同じく, それぞれ15万トン及び2万トンと推定された。

魚市場まぐろ魚体調査 焼津 宮部技官 (～9)。

昭和59年度各省庁地方支分部局等決算関係事務研修会 名古屋 増田事務官 (～6)。

日本大学農獣医学部水産学科長谷川氏, 北洋イシイルカ調査について若竹丸乗船打合せのため来所。

6. 5 第66回GSK委員会 東京 山中技官 : I) 第65回GSK委員会以降の経過として, 昨年の釧路に

おけるシンポジウムの報告書の印刷経過の説明, 委員交代の確認が行われた。また, 浮魚, 環境の合同部会シンポジウムは, 11月29～30日に仙台市で開催し, テーマは「水産研究所における漁海況予報の現状と課題」とし, 各水研より最低1名の話題提供者を出すことを決議した。II) 他部会の本年度における活動計画が討議され, 西日本, 北日本底魚部会の発表テーマ, 開催期日について討議し, 経済部会の今後のあり方は慎重に論議することにした。III) GSKの運営上の検討事項として, 事務局の委員会の出席回数は年2回, 人員は2人との大方の合意は得られたが, 秋の委員会を11月28日, 合同シンポジウムの前日に開き, 最終決定をすることを決議した。

6. 6 極地研第9回南極海洋生物資源特別委員会 東京 小牧技官 : 第8回議事録の承認後, SIBEX I (1983-84) 参加各船の調査と, 過去, 将来のBIO-MASS関連諸会合について報告と説明が行われた。SIBEX II (1984-1985) の開洋丸としらせの調査計画が討議され承認を受けた。

昭和59年度かつお漁海況長期予報会議 塩釜 塩浜技官 (～9) : 59年度かつお漁況について情報及び意見交換を行った。東北水研及び関係水試より担当者が出席した。

ポルトガル政府派遣資源研究のための研修者来所 (～16) : ポルトガル水産研究所 M. Azevedo 博士及びマデイラ水産研究所 L. Gonveia 博士, 浮魚資源部でまぐろ資源解析の研修を行った。

6. 7 農水省試験研究機関場所長会議 東京 林企連室長。

4. 8 おっとせい委託飼育打合せ 網走 吉田技官 : 飼育状況を視察すると共に, 供餌量と成長の相關実験の打合せを行った。

北太平洋鯨類目視航海説明会 横須賀 和田技官 : 調査に従事する2隻の調査船 (昭南丸, 第25利丸) の関係者20数名を集め, 調査の手順, 記載方法について説明を行った。

6. 9 東海大学調査船南十字星による駿河湾の異常海況観測とNHK名古屋のテレビ録画撮り 駿河湾 山中, 一井両技官 : 東海大学矢富講師 (フランクトン), 遠水研山中, 一井両技官 (海洋) 及び学生5名が共同して, 異常低温海況を観測した。この録画は, NHK静岡のニュース (6月9日), NHK第1ラジオで放送 (6月13日), NHK名古屋から「シラス不漁」として放映された。

6. 11 CCAMLR 統計整備に関する特別作業部会 ウ
ヅホール 嶋津技官(～16)：南大洋における過
去の商業船データの提出状況を点検し、STATL-
ANT 様式で遡及整備することが合意された。ま
た南大洋の生態系解明に資するための将来のデー
タ収集項目の必要性を検討し、今年9月に行われ
る収集委員会へ向けて報告書を取りまとめた。
6. 12 第36回IWC年次会議 プェノスマイレス 池
田所長、大隅部長、粕谷技官(～22)、嶋津技官
(18～22)：前半の週には技術小委員会、財政運
営小委員会関係会議が行われ、後半の週に本会議
が開催され、種々の決定がなされた。
関東地域、東京地方連絡会議合同会議 東京
川越総務部長。
6. 13 昭和59年度開洋丸南極海調査航海計画打合せ
東京 小牧技官(～14)：資源課において同課、開
洋丸幹部、在京の永延調査員(東大・海洋研)と
討議、既に決定されている航海日程の中で、調査
内容をどうするかを討議。その基本線を中心とし
て16日に参加調査員4名が遠洋水研で調査内容を
詰め、原案を関係者に連絡すること、並行して調
査機材発注の準備を進めることとなった。
6. 14 研究計画打合せ 東京 木川技官(～15)：東海
区水研で、まぐろ類稚仔広域分布に関するデータ
ベースの整備と取りまとめ方法を検討した。
6. 17 調査船研究業務打合せ 石巻 岡田技官(1～
20)：ベーリング海底魚資源調査の経過と結果に
ついて検討し、標本及び調査資材を調査船第37大
吉丸(アラスカ湾資源調査)へ搬入した。
北太平洋水域バイオマス調査生産物売払事務
石巻 竹内事務官(～20)。
6. 18 南太平洋委員会(SPC)沿岸国・遠洋漁業国協議
ヌメア(ニューカレドニア) 林企連室長(～22)
：SPCが実施しているまぐろ・かじき評価計画
は、中西赤道太平洋におけるこれら資源の評価及
び漁獲統計集計を行っている国際機関である。そ
の計画を維持するには、非加盟の遠洋漁業国であ

る日本、韓国等、及び漁獲量の大きいインドネシ
ア、フィリピンの協力が求められてきた。またエル
・ニーニョの影響等によって、まき網船隊を中
西部に大挙して出漁させている米国の統計提出が
求められていた。この会合ではSPC加盟の沿岸
国、事務局と遠洋漁業団との立場を理解し合っ
た。具体的な協力のやり方については、事務局が
関係国政府と協議することとなった。

まぐろ資源及び統計問題検討会 東京 森田部
長、久米技官(～19)：1)まぐろはえなわ漁獲
成績報告書の報告内容に関する協議(最近の不正
確な報告問題を協議し、関係業界の注意を喚起し
て改善を求めた)、2)まぐろまき網統計の検討
(水研集計値と統計情報部作成のFAO統計値の
整合性を検討し、まき網班にその調整を依頼し
た)、3)ミナミマグロ資源問題(日、豪漁業交
渉以前に、最新データに基づく資源の将来予測か
ら、資源管理問題の再検討の必要性を水研側から
提案し了承された)。水産庁関係各課及び業界
(日カツ連、近カツ協、遠カツ協)関係者が出席
した。

食糧・農業政策研究センターにおける講演 東
京 山中技官：「エル・ニーニョ海流と漁業」に
ついて講演した。

6. 19 物品・国有財産の審査及び事務打合せ 東京
白鳥、裕両事務官(～20)。
水産庁氏家運航係長、白竜丸ドック検査のため
来所。
6. 20 農技会企画科長会議 東京 佐藤技官(～21)。
6. 21 農技会電子計算機共同利用全国運営協議会 谷
田部(筑波) 佐藤技官(～22)。
6. 27 魚市場調査 東京 永井技官(～28)。
6. 28 北西大西洋漁業機関(NAFO)科学理事会報告
会 東京 畑中技官(～29)。
6. 30 新観測調査手法評価試験委員会 清水 松村技
官：東海大学委託研究の実施計画について検討し
た。

刊行物ニュース

遠洋水産研究所(吉田主基、馬場徳寿編集)……おっとせいへの漁網片及び梱包用プラスチック・バンド等の絡まり問
題について 30pp. 1983年12月。

浮魚資源部……昭和57年度マグロ類標識放流報告(塩浜利夫編) 11pp. 1984年1月。

松村 阜月……漁場形成に関わる潮目と水塊 沿岸海洋研究ノート 21巻2号：156-165. 1984年2月。

- TAKEDA, M. and H. HATANAKARecords of Decapod crustaceans from the Southwestern Atlantic collected by the Japanese fisheries research trawlers. Bull. Natn. Sci. Mus., Ser. A, 10(1) : 7-24. 1984年3月。
- 勝山 潔 志……体長組成に基づくナミビア沖マアジ (*Trachurus trachurus capensis*) 若齢群の成長推定 昭和58年度漁業資源研究会議西日本底魚部会会議報告 : 5-13. 1984年3月。
- 水産庁研究部……昭和58年度(前期) 調査船照洋丸報告書(北西太平洋のクロマグロ稚仔調査) 55pp. 1984年3月。
- 遠洋水産研究所, 伊豆三津シーパラダイス……昭和58年度オットセイ網絡より調査報告書(飼育場に於ける実験的研究) 11pp. 1984年3月。
- 松村 阜 月……国際宇宙学会と日本の水産研究 遠洋水産研究所ニュース No.52 : 1-3. 1984年4月。
- ENDO, Y.Daytime surface swarming of *Euphausia pacifica* (Crustacea : Euphausiacea) in the Sanriku coastal waters off northern Japan. Mar. Biol., 75(3) : 269-276, April 1984.
- HANAMURA, Y., Y. ENDO and A. TANIGUCHIUnderwater observations on the surface swarm of a euphausiid, *Euphausia pacifica* in Sendai Bay, northeastern Japan. La mer, 22(2) : 63-68, May 1984.
- YAMANAKA, H.The relationship between El Niño episodes and fish migration and yields in the western Pacific. TROPICAL OCEAN-ATMOSPHERE NEWSLETTER No. 25 : 2-4, May 1984.
- YAMANAKA, H.The relationship between migration of bluefin tuna and yields of Japanese sardine in the Western Pacific and El Niño phenomena. Report of 35th Annual Tuna Conference : 1-11, May 1984 (Presentation to Poster Session).
- OKAZAKI, T.Age composition, growth, sex ratio and gonad development of *Salmo gairdneri* and *Salmo mykiss* in the North Pacific. Japan. J. Ichthyol., 31(1) : 23-37, May 1984.
- 水産庁……1983年のさけ・ます調査船の記録 292 pp. 1984年6月。

日米漁業協定に基づく研究者定期協議 提出文書 1984年4月。

- WAKABAYASHI, K.Preliminary report on the joint Japan-U.S. groundfish trawl survey in the Aleutian Islands Waters in 1983.
- OKADA, K.Preliminary report on biomass estimate of pelagic pollock in the Aleutian Basin based on the acoustic survey during 1983 January to March.
- SASAKI, T.A prompt report on Japan-U.S. joint longline survey by *Anyo maro No. 21* in 1983.
- MORI, K.Preliminary report on Japan-U.S. joint survey on selective trawls in the Bering Sea in the winter of 1983.
- YAMAGUCHI, H.Condition of pollock stock in the eastern Bering Sea.
- WAKABAYASHI, K.Condition of flounder stocks in the Bering Sea and Aleutian Islands region.
- TESHIMA, K.Condition of Pacific cod in the Bering Sea and Aleutian Islands region.
- OKADA, K.Condition of Pacific ocean perch, rockfishes, thornyheads, and squids stocks in the Bering Sea and Aleutian Islands region.
- SASAKI, T.Condition of sablefish stocks in the eastern Bering Sea, Aleutian region, and Gulf of Alaska in 1983.
- YAMAGUCHI, H., K. TESHIMA and K. OKADACondition of pollock, Pacific cod, Pacific ocean perch, rockfishes, and flounder stocks in the Gulf of Alaska.
- FAJCruise plan for cooperative Japan-U.S. groundfish resource survey in the Bering Sea and Gulf of Alaska in 1984.
- FAJCruise plan for cooperative longline survey on sablefish and Pacific cod in the eastern Bering Sea, Aleutian region, and Gulf of Alaska in 1984.
- FAJCruise plan for cooperative survey on selective trawls in the Bering Sea in 1984.

遠洋 No. 53 (July, 1984)

第27回おっとせい年次会議科学小委員会 提出文書 1984年4月。

- YOSHIDA, K and N. BABAJapanese pelagic investigation of Fur seals, 1982. 67pp.
YOSHIDA, K and N. BABADevelopment and application of a biotelemetric system for the study of fur seal resources. 17pp.
YOSHIDA, K and N. BABAThe problem of entanglement of fur seals in trawl nets, plastic bands, etc.. 30pp.
YOSHIDA, K., N. BABA and S. YAJIMAResults of studies of trawl nets collected on the breeding island during the breeding season of 1982. 55pp.
-

日本・ニュージーランド漁業協議 提出文書 1984年5月。

- HATANAKA, H. and K. KATSUYAMAThe outline of Japanese trawl fisheries for finfishes in 1983 and early 1984 in New Zealand waters. (JPN Doc. 84/1)
UOZUMI, Y.The recent status of Japanese squid trawl fishery in New Zealand waters laying stress on 1982/83 and 1983/1984 fishing years. (JPN Doc. 84/2)
KAWAHARA, S.Japanese squid-jigging fishery in 1983/84 fishing season around New Zealand. (JPN Doc. 84/3)
-

ミナミマグロ三国科学者会議 提出文書 1984年5月。

- HISADA, K. and H. KONOThe recent status of Japanese longline fishery for southern bluefin tuna. (SBFWS/84/2)
HISADA, K. and H. KONOBiological evaluation of the recent interim management program for the Australian southern bluefin tuna fisheries. (SBFWS/84/3)
NISHIKAWA, Y. and S. KIKAWAPreliminary results of Japanese larval southern bluefin tuna investigations. (SBFWS/84/4)
HISADA, K. and H. KONOThe stock assessment of southern bluefin tuna updated by inclusion of 1981 data. (SBFWS/84/5)
-

IWC/36回科学小委員会 提出文書 1984年5月。

- Anon.Progress report on whale research, June 1983 to April 1984. IWC/SC/36/ProgRep. (Japan)
KASAMATSU, F. and S. OHSUMIPreliminary estimation of abundance of sperm whale population in adjacent waters to Japan in summer by means of whale sightings. (IWC/SC/36/Sp 8)
KASAMATSU, F. and Y. SHIMADZUOperating pattern of Antarctic minke whaling by the Japanese expedition in 1983/84 season. (IWC/SC/36/Mi 21)
KASUYA, T.Catch and effort data of Japanese Baird's Beaked whale fishery off Boso Peninsula. (IWC/SC/36/SM 14)
KATO, H., Y. SHIMADZU and K. KIRISHIMASome developments of biological simulation to examine historical changes in age at sexual maturity of the Antarctic minke whale. (IWC/SC/36/Mi 23)
MIYASHITA, T.Report of a research cruise for population assessment of Baird's Beaked whales off the Pacific coast of Japan. (IWC/SC/36/SM 15)
MIYASHITA, T. and F. KASAMATSUPopulation assessment of the Western North Pacific stock of Bryde's whales. (IWC/SC/36/Ba 10)
MIYASHITA, T. and R. ROWLETTTest-Firing of .410 streamer marks on Nissinmaru No.3 1983/84 Antarctic season. (IWC/SC/36/Mi 26)

- OHSUMI, S. ……Estimation of number of efficiency marked Southern Hemisphere minke whale. (IWC/SC/36/Mi 19)
- SHIMADZU, Y. ……An analysis of catch and effort data of Japanese Antarctic minke whaling. (IWC/SC/36/Mi 20)
- SHIMADZU, Y. ……Foetal growth and biological characteristics of female sperm whale for the interpretation of the pregnancy rates in the North Pacific. (IWC/SC/36/Sp 4)
- SHIMADZU, Y. ……Some comments on the de La Mare-Cooke model for the female sperm whale. (IWC/SC/36/Sp 5)
- WADA, S. ……Supplemental analysis of CPUE of the Okhotsk Sea-West Pacific stock of minke whales. (IWC/SC/36/Mi 24)

北西大西洋漁業機関(NAFO)科学理事会 提出文書 1984年6月。

KAWAHARA, S. ……Japanese research report for 1983. (SCS Doc. 84/VI/19)

人事のうごき

- | | |
|---|--|
| 4. 1 命 遠洋水産研究所総務部庶務課課長補佐
(北陸農業試験場総務部庶務課庶務係長)
技 惣 塚 誠 一 | 4. 1 命 水産庁東光丸二等機関士
(遠洋水産研究所俊鷹丸二等機関士)
技 清 水 翼 |
| 4. 1 命 遠洋水産研究所総務部庶務課課長補佐
(北陸農業試験場総務部庶務課庶務係長)
技 惣 塚 誠 一 | 4. 1 命 西海区水産研究所陽光丸操舵手
(遠洋水産研究所俊鷹丸操舵手)
技 田之畑 康 隆 |
| 4. 1 命 遠洋水産研究所俊鷹丸二等機関士
(水産庁漁政部漁政課船舶予備員)
技 前 田 啓 行 | 4. 1 命 水産庁開洋丸司厨員
(遠洋水産研究所俊鷹丸司厨員)
技 今 野 金 男 |
| 4. 1 命 遠洋水産研究所俊鷹丸甲板員
(水産庁漁政部漁政課船舶予備員)
技 渡 辺 敏 彦 | 4. 1 退 職
遠洋水産研究所俊鷹丸甲板員
技 関 健 剛 |
| 4. 1 命 遠洋水産研究所俊鷹丸甲板員
(北海道水産研究所北光丸甲板員)
技 森 耕 一 | 4.12 命 遠洋水産研究所底魚資源部長
(遠洋水産研究所海洋部長)
技 大 滝 英 夫 |
| 4. 1 採用 遠洋水産研究所総務部会計課
事 國 分 光 雄 | 4.12 命 遠洋水産研究所底魚資源部北洋底魚資源研究室長
(遠洋水産研究所底魚海獣資源部北洋底魚資源研究室長)
技 岡 田 啓 介 |
| 4. 1 採用 遠洋水産研究所企画連絡室
技 遠 藤 宜 成 | 4.12 命 遠洋水産研究所底魚資源部遠洋トロール資源研究室長
(遠洋水産研究所底魚海獣資源部遠洋トロール資源研究室長)
技 畑 中 寛 |
| 4. 1 採用 遠洋水産研究所企画連絡室
技 平 松 一 彦 | 4.12 命 遠洋水産研究所底魚資源部おっとせい資源研究室長
(遠洋水産研究所底魚海獣資源部おっとせい資源研究室長)
技 吉 田 主 基 |
| 4. 1 命 東海区水産研究所総務部会計課課長補佐
(遠洋水産研究所総務部庶務課課長補佐)
事 西 田 茂 雄 | |
| 4. 1 命 水産庁研究部研究課企画調査係長
(遠洋水産研究所総務部庶務課図書係長)
技 久 田 幸 一 | |

遠洋 No. 53 (July, 1984)

- | | | | | | |
|--------|--|--------|--------|--|-------------------------------------|
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部主任研究官
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部主任研究官) | 技山口 閑常 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部鯨類資源研究室長
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部鯨類資源研究室長) | 室長
(遠洋水産研究所海洋部海洋第2研究室長)
技山中 一 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部主任研究官
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部主任研究官) | 技佐々木 喬 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部南大洋生物資源研究室長
(遠洋水産研究所海洋部南大洋生物資源研究室長) | 技粕谷 俊雄 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部主任研究官
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部主任研究官) | 技若林 清 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部主任研究官
(遠洋水産研究所海洋部主任研究官) | 技嶋津 靖彦 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部北洋底魚資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部北洋底魚資源研究室) | 技手島 和之 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部主任研究官
(遠洋水産研究所海洋部主任研究官) | 技小牧 勇蔵 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部遠洋トロール資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部遠洋トロール資源研究室) | 技川原 重幸 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部主任研究官
(遠洋水産研究所海洋部主任研究官) | 技宇都 正巳 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部遠洋トロール資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部遠洋トロール資源研究室) | 技魚住 雄二 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部主任研究官
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部主任研究官) | 技行縄 茂理 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部遠洋トロール資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部遠洋トロール資源研究室) | 技勝山 潔志 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部鯨類資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部鯨類資源研究室) | 技和田 志郎 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所底魚資源部おっとせい資源研究室
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部おっとせい資源研究室) | 技馬場 徳寿 | 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部南大洋生物資源研究室
(遠洋水産研究所海洋部南大洋生物資源研究室) | 技一井 太郎 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部長
(遠洋水産研究所底魚海獸資源部長) | 技大隅 清治 | 5.9 命 | 遠洋水産研究所俊鷹丸司厨員
(水産庁漁政部漁政課船舶予備員) | 雇鈴木 伸 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部海洋第1研究室長
(遠洋水産研究所海洋部海洋第1研究室長) | 技松村 卓月 | 5.24 命 | 遠洋水産研究所長池田郁夫海外出張中同所長事務代理 | 技林 繁一 |
| 4.12 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部海洋第2研究 | | 5.24 命 | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部長大隅清治海外出張中同部長事務代理 | 技小達 繁 |

- | | | |
|--------|-----------------------------------|---------------------|
| 6.15 命 | 遠洋水産研究所長池田郁夫海外出張中同所長事務代理 | 技 穴 戸 正 義 |
| | | 6.16 命 |
| | 技 川 越 一 徳 | 水産庁漁政部漁政課船舶予備員 |
| | | (遠洋水産研究所俊鷹丸機関員) |
| 6.15 命 | 遠洋水産研究所企画連絡室長林 繁一海外出張中同室長事務代理 | 技 澤 田 真 稔 |
| | | 6.24 免 |
| | 技 森 田 祥 | 遠洋水産研究所企画連絡室長事務代理 |
| 6.15 免 | 遠洋水産研究所長事務代理 | 技 森 田 祥 |
| | 技 林 繁 一 | 6.27 免 |
| 6.16 命 | 遠洋水産研究所俊鷹丸機関員
(水産庁漁政部漁政課船舶予備員) | 遠洋水産研究所長事務代理 |
| | | 技 川 越 一 徳 |
| | | 6.27 免 |
| | | 遠洋水産研究所海洋・南大洋部長事務代理 |
| | | 技 小 達 繁 |

それでも地球は動いている

(編集後記)

国際捕鯨委員会(IWC)は大隅部長の解説にもある通りの結末となった。我々の目には何とも理不尽と映る。いわゆる環境保護主義者の次の攻撃目標は東アジア諸国の流し網漁業であるという。折しもFAO世界漁業管理開発会議に出席した米国代表は「漁網及び網破片に絡まる生物資源の保護」と題するノートを提出し、pelagic driftnetsを名指して非難している。これが公海におけるさけ・ます流し網、大目流し網、いか流し網漁業等を指していることは、時を同じくして配られた国際グリーンピースのRebert Eisenbud氏の論文に照らしても明らかである。新聞種となった陰湿な動きと二重写しとなって神経を逆撫でされるように感じたのは筆者だけであろうか。もっともこのような風潮をいたずらに嘆いても仕方がない。歴史が示す通り、どこにも、いつでもファナチックな人間はいて、時には力を得るけれども、冷静な対応によって結局は是正されるものである。

米国海洋漁業局(NMFS)はこの11月にホノルル市で「Marine debris」に関する研究集会を開く。それに提出されるNancy Wallis論文では、捨てられた網によって、海獣、海鳥、海がめ等がどれだけ被害を受けたかが、熱っぽく述べられている。その上で彼女は「廃棄物を取除け、狙わない生物を獲らないように漁具を改良せよ」と力説する。この主張に反対はできない。我が国でも人工礁のかかり網や流れ網によるスクリュウ事故等が具体的な問題となっていて、関係者はその対応に努力している。栽培漁業を進めるに当たっても、漁業環境の保全が前提となっている。我が国は漁業先進国として、これらの問題の処理技術を指導する立場にあるとさえ言えよう。

いわゆる自然保護運動に対して感じられる違和感是非難の対象が特定の外国の漁業にのみ向けられ、海産動物

に被害を与えているそれ以外の社会活動を無視しているという独り善がりがある。彼らは世界的に大きな問題となっている生活排水、排気ガスとそれによる酸性雨、除草剤、放射性物質の投棄と放出等が水生生物に与えている影響をどう取り上げているのか、我々にははっきりと伝わって来ない。一次産業である水産にとって、環境破壊は産業の基盤の喪失につながる。我が国の水産関係者はこの自覚を持っていると宣言しても良い筈である。その上で社会活動が生産に与える影響の許容限界を一部の人間の主観ではなく、普遍的な基準にたって判断することの必要を体系として主張したい。

人類の福祉を目指しつつ、本来の自然を維持しようという意図は、南極条約において鮮明に表現されている。1980年5月28日に調印された「南極の海洋生物資源の保存に関する条約(CCAMLR)」の前文では、南極大陸を囲む海洋の環境の保全と生態系の保護を、この海域に集まる生物資源の利用と共存させることが唱われている。SCAR及びSCORはCCAMLRの調印に先立ち1972年9月、10月から南極の海洋生物資源とその研究に関する検討を重ね、1977年にロンドン市で開かれた第9回南極条約協議会議には「南極海海洋生態系および海洋生物資源に関する生物学的研究計画(BIOMASS)」への参加と関連活動の促進を呼びかけた。今回開洋丸による調査の意義と実際とを報告願った小牧主任研究官が当初から参画してこられたFIBEX、SIBEX計画は、普遍的な基準に立った自然の保護と利用を目的としたこの呼びかけを受けて進められてきた第1次、第2次共同調査なのである。(林 記)

昭和59年7月15日発行

編集 企画連絡室

発行 水産庁遠洋水産研究所

〒424 静岡県清水市折戸

五丁目7番1号

電話 <0543> 34-0715